



1月の平和祈念式（リモート開催）は、5年生の境先生による「平和祈念館」についてのお話でした。以下が、その概要です。

- 平和祈念館は、もとは城山小学校の子どもたちが勉強をする校舎でした。稲佐山のふもとの緑豊かな丘にそびえたち、白く美しい校舎として有名でした。城山小学校の子どもたちにとっても、自慢の校舎でした。
- しかし、1945年8月9日に落とされた原子爆弾により、1,400名の児童、31名の先生方が亡くなり、生き残ったのは、45名の児童と4名の先生だけでした。
たくさんの尊い命が奪われ、自慢の校舎は大きく壊されてしまったのです。城山小学校では勉強ができなくなり、今の稲佐小学校の教室を借りて勉強することになりました。
- その後、被爆した校舎を修理して、教室として勉強できるようになりました。時が経ち、古くなって危険だということで、被爆校舎を取り壊し、新しい校舎に建て直す案が出されました。
しかし、原爆が落とされたときに実際に被害にあった建物を残したいという強い訴えが、当時の育友会や慰霊会などの皆さんからありました。その結果、階段塔と、その両側を含んだ校舎が残されることになりました。
- 被爆校舎を残したものの、14年間は危険な建物としてフェンスで囲まれ、立入禁止になっていました。
しかし、原爆の恐ろしさを伝えるために残したのだという城山小の子どもたちの願いが叶い、当時の資料が見られる、今の平和祈念館となりました。
- 平和祈念館には、毎日、たくさんの人が見学に訪れます。子どもも大人も、長崎だけではなく日本全国から、さらにはイタリアやドイツなど世界の国々からもたくさんの人が学びに来られています。
訪問された方々が送ってくれた手紙や寄せ書きには、原爆の恐ろしさについて知ったことや、今過ごしている日常の大切さ等、平和を願う気持ちがあふれています。
平和祈念館として残された被爆校舎に込められた平和への願いが、世界へと広がっているのです。
- 城山小学校の育友会会長や平和発信協議会の会長を務められた内田伯（うちだ つかさ）さんは、「目から消え去るものは、心からも消え去る。原爆の遺構は、残すこと、見て感じることに意味がある」とおっしゃっています。
城山小学校のみなさん、これからも平和への思いをつなぎ、平和祈念館を守っていきましょう。

